【郷土史への扉】

一遍上人と大隅正八幡宮

～激動の時代に神様から授かった信仰～

踊り念仏の時宗を最初に始めたお坊さんに、一遍上人という人がいます。全国を歩いて信仰を広めたため、遊行上人ともいわれています。伊予国（今の愛媛県）で生まれ、全国の有力な寺社をめぐり、布教しています。その様子は『一遍上人絵伝』などで知ることができます。一遍上人は建治三（一二七七）年、大隅正八幡宮（鹿児島神宮）にもお参りをしています。

当時、世情は騒然としていました。というのは、今の中国を支配していた蒙古（モンゴル帝国の一つ＝元）が日本に攻めてきた頃だったからです。その影響は全国に広がり、その後、何十年も続いています。一遍上人の信仰にも大きな影響を与えました。

蒙古襲来

元は攻める前から、六度も日本に従うように使者を派遣していますが、当時の鎌倉幕府は拒否し、使者を鎌倉で斬ったこともあります。そのため、博多湾への襲来に備えて、九州にいる御家人（幕府の家来）たちに命じ、石で海岸沿いに防御ラインを築いたり、異国警固番役を割り当てて警備を強化したりしました。今でも、博多湾の周辺には石塁が残っています。動員された鹿児島の人たちは、主に箱崎地区や西側の今津あたりを担当したようです。

このような中、蒙古は、文永十一（一二七四）年には三万人、弘安四（一二八一）年には十五万人の大軍で博多に攻めてきました。日本軍はそれまで見たこともない火薬を使った鉄砲や集団戦法に苦戦し、大宰府まで撤退を余儀なくされました。しかし、日本にとっては幸いなことに、二度とも風が吹きました。最初は博多湾沖、二度目は肥前国鷹島（長崎県松浦市）で、大風のため、元軍は多大な被害を受け撤退します。この時に吹いた風がやがて「神風」とされ、後の日本の思想に多大な影響を与えました。危機の時には、神風が吹いて日本を救うというのです。先の戦争でも「神風特攻隊」という名前に使われました。

幕府は勝利したお礼と神頼みで、盛んに全国の神社仏閣に蒙古撃退の祈祷会（敵国調伏）を開くように命令しています。大隅正八幡宮でも弘安八（一二八四）年など数回実施しています。

鷹島沖の水中遺跡から発掘された元軍のてつはう（鉄砲）

大隅正八幡宮での神託

一遍上人は、このように騒然とした時代に、大隅正八幡宮にお参りをしました。その時に、八幡神からの神託（お告げ）を受けたのです。

『とことはに南無阿弥陀仏ととなふれば　なもあみだぶにむまれこそすれ』

正八幡宮にお参りする一遍上人：『一遍上人絵伝』より

「いつまでも変わらずに南無阿弥陀仏を唱えれば、そのままあなたもきっと南無阿弥陀仏になりきって、浄土に往生できる」という意味だとされています。

一遍上人にとって、同じように大変重要な悟りを得たのが、和歌山県にある熊野権現でした。一遍上人ゆかりの神奈川県藤沢市の遊行寺（清浄光寺）では、大隅正八幡宮は熊野権現となんで、今でもとても大事にされています。

激動の時代には、鎌倉新仏教と呼ばれる新しい宗教が誕生し、庶民に広がっていきます。鹿児島神宮もその一端を担っていたのです。

文責＝重